

千葉準一委員の横顔と学説

東京都立大学 助手 王 万光

はじめに

千葉先生は、現在、大学院研究者養成コースや本年4月開校の都庁舎キャンパス経営大学院（ビジネス・スクール）、また経済学部で熱心な教育活動を行っている。特に、近年の学部千葉ゼミナールの盛り上がりには大変喜んでおられるようである。

先生は、昭和44年横浜国立大学経済学部卒業後、東京大学大学院経済学研究科修士課程を修了され、昭和50年同博士課程を単位取得退学された。また博士課程修了に先立って、昭和49年立正大学経営学部の研究助手として採用され、その後、専任講師、助教授を経て、昭和54年から東京都立大学経済学部助教授として転任された。その後、昭和58年には東京大学に博士論文を提出して経済学博士号を取得され、また昭和62年には都立大学の教授に昇任されて現在に至っている。

その間、平成11年度から平成14年度まで、日本における戦後最大といわれる大学の転換期に、経済学部長として二期、校務に専念された。筆者はこの間、大学院博士課程の院生であったが、先生が思い通りに研究時間がとれずに、大変困っている様子を拜見した。しかし現在は、以前のような研究活動に戻られたことで、そのお顔も少しばかり和やかになられたように思われる。

千葉先生の学説の特徴

先生の御研究の特徴のひとつは、特に1980年代

中頃から、国際的な学術交流を精力的に行われていることである。その出発点は、1985～86年におけるロンドン大学（London School of Economics）への御留学であった。指導教授は、世界の会計学の泰斗W.T.バクスター教授であり、千葉先生はバクスター先生から実に多くのことを学んだそうである。

1993年7月には、国際交流基金の派遣教授として、中国の遼寧大学国際経済系で1ヶ月の集中講義をなされ、遼寧大学から4年間の客座教授の称号が与えられた。先生は中国の東北部がお好きであり、その後も数回、遼寧大学（瀋陽）や、また大連大学（大連）などから招聘されて、教員や大学院生に講義しておられる。また、1995年10月には、A.ヤルガ教授からの招聘で、ポーランドのウッチ大学でも特別講演等をなされた。

しかし国際学術交流の中で、先生が最も力を入れているのは、1990年に発刊された英国の国際雑誌*Accounting, Business and Financial History*の編集委員会委員としてのお仕事である。この雑誌で先生は、世界からの投稿論文のレフリー等の作業に従事されている外、自らも厳しい審査を受けて論文を発表しておられる。この雑誌は2001年11月号で「日本特集号」を組み、先生と英国エクセター大学T.クック教授との共同編集によって、8名の日・英・蘭の会計学者達による7本の日本会計制度史に関する論文が収録された。国際的な学術「交流」である限り、外国の知識の一方的な輸入のみではなく、日本から海外へ発信する作業も

不可欠であるというのが先生の信念である。

このように、先生の学術業績には、日本語や英語のみならず、中国語やポーランド語等〔これらは翻訳〕によるものもみられる。また先生の研究室には、学部学生を含め、アジアからの多くの研究生や大学院生、またその他の国からも客員教授等が訪れ、誠に賑やかである。それ故、先生の教室（特に大学院）の卒業生は、現在、日本のみならず、中国や韓国等の多くの都市で、また研究職を中心とする多方面で、活躍中である。

もう一つの特徴

次に、先生の御研究のもう一つの特徴は、初期の段階から社会学的方法が基底にあるということである。恐らくこれは、先生の経済学部時代の恩師であった黒澤清先生からの影響によるものと思われる。

先生の最初の研究プロジェクトの集成である『会計の基礎構造』（森山書店、1980年、日本会計研究学会賞受賞）は、会計測定論の問題から出発し、M.ウエーバーの方法に依拠しながら、ひとつの会計測定機構である「複記式勘定構造」の形成論理の社会的・歴史的な意味を理解しようとしたものであった。

次の先生の研究プロジェクトの集成である『英国近代会計制度』（中央経済社、1991年、日本会計史学会賞受賞）では、「信託」概念と共に英国会計制度のもうひとつの基底範疇として「公共圏」概念が措定されている。そこでは、J.ハバーマスの『公共圏の構造転換』における概念構成が採用されている。

そして先生の第三の研究プロジェクトの集成である『日本近代会計制度』（中央経済社、1998年）

では、『商工省準則』から戦間期の陸軍省と大蔵省による会計経理統制、敗戦後の「企業会計基準法」構想の形成と展開を経て、今日の「企業会計体制」に至るまでの日本会計制度の変遷が扱われている。ここでもその基本的な方法論においては、現状での日本会計制度の形成過程とその社会的・歴史的意味を自省的（自己批判的）に理解するウエーバーやハバーマスの方法が採用されている。筆者（外国人）にとり、初めて出会う、単なる進歩・発展史観に基づく研究とは異なる興味深い研究書であった。

先生の現在の関心は、N.ルーマンの方法を用いて、中国会計制度を分析することである。米国の制度学派（T.ヴェブレンやJ.R.コモンズ）にも大変な関心をもっておられる。

また先生の今後の最大の研究課題は、世界主要国の会計制度の類型化を行うことであり、そのため比較座標軸を析出することである。先生の個性的で興味深い研究成果を期待したい。

おわりに

ビジネス・スクールの社会人大学院生（山下功起・水口活也）が作成したホーム・ページ「千葉先生プロフィール」にもあるように、先生の最近の趣味は、温泉、睡眠、人と語り、それに音楽鑑賞（ジャズはクリフォード・ブラウン、クラシックはバッハ迄、純邦楽）である。いうまでもなく、先生と直接に接した人が一人残らず知っているように、もうひとつは「お酒」である。

そのお人柄と共に、興味深い千葉先生の会計学の世界を、是非一度味わって、新たな境地を切り拓いて頂きたいと思う。